

☆☆☆ Library Eye 2021 ☆☆☆

第17号 2021年8月1日(日)

発行元 明星中学校・高等学校 図書館



【1学期を振り返って】

今年度は2年ぶりに新生を対象にした図書館ガイダンスが行うことができました。その時に、ひとり1冊本を借りてもらい、図書館利用や読書を習慣づけたいと考えていたのですが……。その後、緊急事態宣言が発出され、分散登校が始まり、図書館利用時間も大幅短縮となり、早めの夏休みに突入してしまいました。

例年通りとはいかない1学期でしたが、早朝利用が可能だった6月は、コロナ前の来館者数より多い3千人を超えるなど、活発な図書館利用が見受けられました。貸出冊数は中学生が約2千冊(ひとり平均5.5冊)、高校生が約1千冊(同0.9冊)で、中学生の方がかなり多く本を読んでいることがわかります。

貸出回数が最も多かったのは、『小説ライアー×ライアー』(講談社文庫)と『薬屋のひとりごと』(コミック)で、7回でした。直木賞と本屋大賞のWノミネートで話題となった『オルタネート』(加藤シゲアキ・新潮社)、『15歳のテロリスト』(松村涼哉・メディアワークス文庫)、『ドラゴン桜2』などが6回で続き、以下、『交換ウソ日記』(櫻井いよ・スターツ出版文庫)、『あの星が降る丘で、君とまた出たい。』(夕見夏衛・スターツ出版文庫)、『ありえないほどうるさいオルゴール店』(瀧羽麻子・幻冬社文庫)、『余命一年と宣告された僕が、余命半年の君と出会った話』(森田碧・ポプラ文庫)、『5分シリーズ』(エブリスタ編・河出書房新社)などが5回となっています。ランキング上位本はコミック、ドラマや映画の原作、長いタイトル、表紙は青色、文庫本が多いようです。

図書館は夏休み期間中も開館しています。最長2時間の利用制限がありますが、貸出冊数は10冊まで、期間も延長していますので、1学期、あまり図書館を利用しなかった人も、是非、来館してみてください！

【夏休みの宿題 おすすめの1冊】

今までに出合った本の中で、忘れられない本はありませんか？あるいは他の人と感想を共有してみたいと思った本は？そんな1冊を紹介する、POPを描く宿題が中学生に出ています。今年はコロナ禍2回目の夏休み、昨年より落ち着いて読書ができそうですね。

小さい頃の思い出の本や、以前読んだことのある本をもう一度ひもといてみるのもお勧めです。自分が強く感じたことを、他の人に伝えてみませんか？

【新しい仲間が増えました！】

7月12日から図書館にやってきた、新しい仲間をご紹介します。ぎゅっと抱きしめたくなる、大きなふわふわのくまのぬいぐるみです。年齢や性別は不明です。誰でも好きな名前と呼べるように、呼び名もあえて決めないことにしました。

こっそりハグしたり頭をなでたり、隣に座って寄りかかって読書したりと、すでに人気者です。是非、かわいがってくださいね！



学年	1年	1,084
中学	2年	644
	3年	440
	合計	2,168
高校	1年	506
	2年	430
	3年	289
合計	1,225	
全校合計		3,393

順位	タイトル	貸出数
1	小説ライアー×ライアー	7
2	15歳のテロリスト	6
2	オルタネート	6
4	交換ウソ日記 1	5
4	交換ウソ日記 2	5
4	あの星が降る丘で、君とまた出たい	5
4	ありえないほどうるさいオルゴール店	5
4	彼女は僕の「隣」を知らない	5
4	アパレルガールがあなたの洋服をお選びします	5
4	病院でちゃんとやっつてよ	5
4	余命一年と宣告された僕が、余命半年の君と出会った話	5
4	小説きみと、波にのれたら	5
4	桜のような僕の恋人	5
4	明日の世界が君に優しくありますように	5
4	英検2級過去6回問題集 '19年度版	5
4	意味が分かって読める話『5分シリーズ』	5
4	5分後に切れないラスト『5分シリーズ』	5
4	5秒後に意外な結末：ミタワロスの青い迷宮	5

【《知》の巨人に学ぶこと】

宇宙飛行士の野口聡一氏が、宇宙飛行士を目指すことを決定づけた本として挙げているのが高校3年生のときに読んだという『宇宙からの帰還』ですが、この本の著者でもある、ジャーナリストの立花隆氏が今年4月に亡くなりました。

6月24日、各新聞が一斉に追悼記事を発表しましたが、そこに描かれた立花隆氏の生き方こそ、まさに2022年度から実施される探究型学習の本質というべきものでした。その、いくつかを、ここに紹介しておきましょう。

☆何でも知っている人」ではなく「知りたがる人」だった。(朝日)

☆「3万冊の本を読み、100冊の本を書いた」「関心や興味の前には、恐怖もふつとんでしまうような人」「いい意味で理系の人だった。腑分けし、分析する力が突出していた」「古今東西の本を読み、知を増やすことに本当に貪欲だった」(読賣)

☆「分野を超え、理系と文系、現代と未来といった垣根を軽々と飛び越える人」「本質をつかむ力が優れていて、著書の範囲を超えた本当の知的巨人」(毎日)

この、ジャンルや時代を超えて放射線状に広がる知的好奇心こそが探究型学習のコア(核)とも言うべきものなのではないでしょうか。



【コネクティング・ザ・ドッツ？】

ベストセラー『生物と無生物のあいだ』の著者として知られる福岡伸一氏は、少年の頃から「人と目を合わせられず、下ばかり見ていた」そうで、それで地を這う昆虫たちと仲良くなったというわけでもないのかもしれませんが、「幼いころから好奇心のおもむくまま掘り下げた興味・関心が、思いも寄らぬところで結実してきた」といいます。

その福岡氏にとっての《コネクティング・ザ・ドッツ》(日本流に言えば「昔取った杓柄?」)の1点が、少年時代に図書館で出会った『ドリトル先生航海記』で、その時代設定と進化論を打ちたてたチャールズ・ダーウィンがガラパゴス諸島を訪れた時期が同じ19世紀前半だと気づいた瞬間、福岡氏の心の中で点と点とが結びつき「発火した」のだそうです。

このことについて福岡氏は、つぎのように語っています。

「小さな穴を掘り進めていった結果、様々な水脈に出合った。寄り道、回り道をしながらアプローチしていくと、必ず無関係なドットと出合う瞬間がある」「好きであり続けることが大切」
「人間はまったく無関係な点を結び合わせることができる」(朝日新聞)2021.7.5。

21世紀型学習は、こうした根気強く貪欲な《突破力》《ワクワクするチカラ》なしには語れないのです。

【「？」に火をつける？】

最近、埼玉県の小6年生の少年が、昼間でもシマトリネコに集まるカブトムシがいることに疑問を持ち、観察によって取った精緻なデータを、専門家の協力のもとに作成・発表した論文が、世界的な生物専門誌に掲載されました。

「なぜだろう？」

この素朴な疑問が、すべての出発点でした。

石ころを一日中でも眺めていられたという無欲恬淡の孤高の画家熊谷守一も、50歳を過ぎてから17年の歳月をかけ、その精密度によってペリーを驚嘆させたという日本地図を作製した伊能忠敬も、あと10年あれば本当の画家になれたのに、と嘆いた葛飾北斎(享年90歳)も、いくつになっても好きなことに夢中になれる、少年のように純粹無垢な心をもちつづけていたのではないのでしょうか。

